

AI革命

東京都青梅市 峯木 貴

1. AIの歴史

ここ最近AIの進展が目覚ましく、かなり高度なものが出てきた。プロンプト次第で、ブログ記事やパワポ資料、イラスト、プログラミングコード、楽曲など、プロ顔負けの作品が簡単にできるようになった。

AIチェスが人間を破ったのが1997年。AI囲碁は2016年。AI将棋は2017年。この流れからして、文章や絵といったものを作るAIが人間を超えるのはそう遠い話ではなかった。ところで、いくらAI将棋が強くなって人間に勝利しても、人間の棋士が必要なくなった、といった話には発展しなかった。これは、将棋などはゲームというルールが決まった枠の中だけなので、コンピュータが強いのは当たり前なことと人々が認識していたからだろうか。しかし、こと文章や絵に関しては、生成AIに対する反対意見が多数を占めた。文章や絵といった人間の感性に深く根付くものなのにAIの方が優れた作品を作るということは、人間にとって都合が悪いのである。これらはAI将棋などよりはるかに汎用性が高く、自分たちの職が奪われるためである。

ところで、AIにはかつて2回のブームがあった。最初のAIブームは1950年代から60年代にかけてであった。コンピュータ黎明期であったためだろうか、コンピュータに対する過度な期待もあり、いずれは推論や探索が高度にできるようになると思われていた。しかしコンピュータのハード面の能力が非常に低く、期待は裏切られブームは萎んだ。

2回目のブームは1970年代後半から80年代。エキスパートシステムといって、専門分野の知識を取り込むことで専門家のようにふるまうプログラムが開発された。専門家の知識を多量に集めたのだからさぞかし素晴らしいAIができると期待されていた。しかし、いくら専門的な知識を集めても、日常会話程度のことができない無能AIができてしまった。これはコンピュータのソフト面での挫折ともいえる。

そして、3回目のAIブーム。ハード面では超高速コンピュータ、ソフト面ではビッグデータとディープラーニングといった役者が揃ったため、人間以上の作品を作るまでに進化し現在に至っている。しかし、便利になりすぎて人間の仕事がなくなる、といった反対意見も多い。

2. AIの利用状況

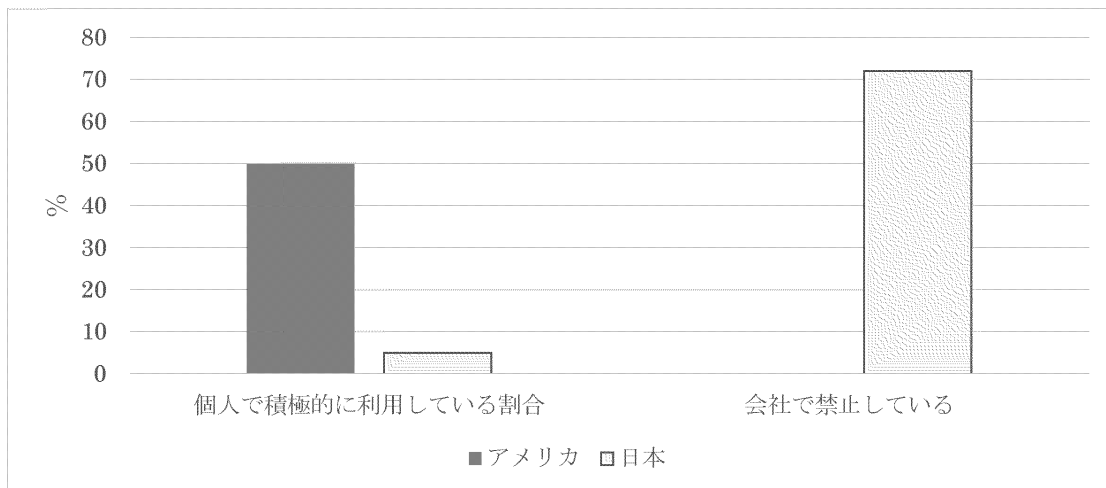
2022年11月。満を持してOPENAIがChatGPTを発表した。

そして、あれから一年たった。

生成AIの進化はとどまることを知らず、AGI（汎用人工知能）に近づきつつある。それに対して日本人はどのような対応をしてきたのだろうか。

それは「日本の72%の企業がChatGPTの仕事上での使用を禁止する」という愕然とするものであった。

・日米のAI利用率の比較



アメリカの企業で日常的にChatGPTを使っている人は50%ほどいるという。それが、日本では5%にも満たない。圧倒的な差は現状のAIが完璧に仕上がったものではないから使えないといった、日本人の完全主義からなのかもしれない。最近のプログラムの公表の潮流であるが、AI会社は途中段階のものをどんどんリリースし、利用者にバグを見つけてもらうといった手法を取り入れている。完全なものを作るのに何年もかかっていたら、出来上がった瞬間に時代遅れのものになってしまうからだ。

日本の企業が利用しないのは、企業情報の流出やその情報を生成するといった理由もある。しかし、ここ一年でこの2つのことはかなり改善されているが、このような良い意味での改善はマスコミでは話題にならない。ところで、AIにはもっと重要なことがある。倫理に関することである。このあたりも日本企業が使わない理由なのであるが、これも着実に改善されている。逆に改善されすぎてAIが優等生的な回答をするため面白みがなくなっているのが難点である。AIにも様々なものがあるが、これらの倫理に関する反応は各社異なる。倫理規定にぎりぎり引っかかるような質問を投げかけたときに、どのような反応を示すかで分かる。

30年ほど前のインターネット黎明期でも同じようなことが起こっている。インターネットは海のものとも山のものともわからないもので、企業は利用に慎重だった。そのころ日本は不動産バブルで、土地を転がす方が儲かるのでインターネットなど見向きもしなかった。当時は世界のトップ10のほとんどが日本企業であった。しかし、現在は全く逆転している。トップ10のほぼすべてが海外のインターネット関連企業である。しかし、その世界も生成AIの進展でひっくり返される可能性がある。

私事で恐縮であるが、30年以上前、インターネットという言葉が初めて雑誌に載ったときに、すぐにそのバスに乗った。環境に関するホームページを開いた。かろうじてバスに乗ったものの一番後ろの席である。前の人は何をしているのかわからない。専門用語がどんどん出てくる。そして、その先頭で運転をしていたのが、孫正義でありホリエモンであった。私はそれでも必死に後方座席にしがみついたが、運転手がザッカーバーグやジャック・ドーシーに代わるとだんだんついていけなくなった。

しかし、幸いなことにその横を見たことのないバスが通りすぎていくのを目撃した。AIというバスである。私はすぐに新しいバスに飛び乗った。こちらのバスの加速は激しい。ものすごいGで後部座席にへばりついて身動きができない。速度はどんどん上がっていく。気が付くと運転手は孫正義やホリエモンであった。かれらはインターネットというバスは代理人に任せて、AIといった新しいバスをもうスピードで運転している。というかすでに自動運転なので運転することもない。ただ、方向を指示するだけである。

AIはかつてのインターネットの時代よりもはるかに速いスピードで進化している。日本企業は既に1年出遅れてしまった。これはインターネットの時代で言うと10年間の遅れになるだろう。来年は2年目ということでさらにすごい技術が出て、AGIといわれるものが登場すると考えられている。日本はここで乗り遅れたら20年の遅れである。失われた20年に匹敵する損失であろう。

この記事が会報に掲載されるのは2024年。その頃にはChatGPTを超える性能をもつ、Google Geminiの最上位版が出るといわれている。2023年はChatGPTの一強時代だったが、2024年は一位二位のライバル同士の争いになる。そうなるに加速度的にAIは進化し、ついにはAGIが登場するかもしれない。近い将来、AGIも各社から出て競争はさらに激化するだろう。そうなるにシンギュラリティも近いことになる。(2045年を待つことはないだろう)

現時点でAIの利用率が最も高いのが米国。二位がEUというデータがある。ここまでは合点がいく。では三位は？なんとインドなのである。インドは英語が公用語としても利用されているため、AIへの親和性が高いと考えられるためだ。英語ができるためプログラマーも多い。AIが進化するとインドはさらに発展するだろう。

さて、その頃には日本はどうなるのだろうか。ついには後進国に沈んでしまうのかもしれない。おそらく良くて下請け専門の国。安くていいものを作るという国民性があるためこの辺りに踏みとどまるだろう。主たる元受けは中国やインドとなるかもしれない。

3. AIの具体的な利用方法

現状において人類最大の文明の利器を一度は使ってみてはいかがであらうか。スマホを持っていれば十分である。

まず、無料のAIサービスサイトに登録する必要がある。そのためには前もってGoogleのアカウントの登録が必要だ。Gメールなどを利用している人はすでに持っているのですので登録できる。

無料のAIサイトでおすすめなのが、

- ① Gpt 3.5 (OpenAI)
- ② BARD (Google)
- ③ Claude 2 (Anthropic)

今のところこの三つが性能を競い合っている。

AIを起動するとテキストボックスに文字が入力できる。そこに日本語で質問すればAIが答えを返してくれる。この辺りの利用方法は、普段使っているSNSと何ら変わりがない。

しかし、ほとんどの人が最初の段階で躓いてしまう。なぜか？それは例えば、こんな質問をしてしまうからだ。

「日本の首相は誰ですか？」

ここでAIは間違えた答えを出す場合がある。また、これなら検索したほうが早いよ。といった答えが返ってくる。ほとんどの場合がそうである。そこでAIは大したことがない、とあきらめてしまう人が多いと聞く。

しかし、それはAIに対する質問の仕方が悪いからである。稚拙な質問に対しては稚拙に答える。これが現在のAIの特徴である。裏返すと専門的な質問には専門的に答えるのである。ここが、私がAI革命といっているゆえんである。生身の人間に対してもそうだと思う。稚拙な質問には稚拙に答えなければならない。しかし、人間は専門的な質問に対し、その質問がその人の専門外であれば専門的に答えられないので、現時点のAIは既に人間を超えているのである。

この質問を「プロンプト」という。このプロンプトの例を以下にあげる。{テーマ}や{ゴール}には自分の知りたいことなどを入れる。また、そのテーマに合わせた専門家を入れる。専門家による活発な議論が繰り広げられるはずである。

あなたは{司会}{専門家 A}{専門家 B}{専門家 C}の役割を持っています。

上記の内容に基づき、今から{テーマ}について交互に発話させ課題と解決方法も混ぜながら、水平思考を使い議論してください。

{ゴール}に向かって議論してください。一人の発言は必ず具体的な事例を入れながら話してください。

一回の発現は必ず 300 文字程度にしてください。必ず 6 回転は議論してください。

必ず{ゴール}について具体的な結論を出してください。各条件は以下の通りです。

#条件

{司会}: 冷静な判断でジャッジする、頭の良い司会者

{専門家 A}: 著名な経済学者

{専門家 B}: テレビで有名な経済ジャーナリスト

{専門家 C}: 著名な経済アナリスト

{テーマ}

- ・ 政党のパーティーは必要か？政治資金規正法の抜け道について。

{ゴール}

- ・ 政治資金規正法にはどのような抜け道があるのか。
- ・ その抜け道をふさぐことはできるのか。
- ・ 政治家のあるべき姿とは。
